

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

杉原薫著 『世界史のなかの東アジアの奇跡』

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学比較地域研究所 公開日: 2021-09-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 早雪, KIM, Joseol メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1012">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1012</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



〔書評〕

杉原薫著

『世界史のなかの東アジアの奇跡』

金 早 雪

1. はじめに
2. 内容と構成
3. 「長期の19世紀」「東アジの奇跡」の読解—方法論を中心に—

1. はじめに

「脱〈西洋中心〉のグローバル・ヒストリー」を描き切った圧巻の大作である。  
帯カバー及び出版社サイトにて曰く：

豊かさをもたらす工業化の世界的普及は、日本をはじめとする「東アジアの奇跡」なしにはありえなかった。それは「ヨーロッパの奇跡」とは異なる、分配の奇跡だった。地球環境や途上国の行方も見据え、複数の発展径路の交錯と融合によるダイナミックな世界史の姿を提示する、渾身のライフワーク。

(<https://www.unp.or.jp/ISBN/ISBN978-4-8158-1000-9.html>)

著者・杉原薫氏は、大阪市立大学を皮切りに日英5つの大学で教鞭をとられ(現在は総合地球環境学研究所特任教授)、名著『アジア間貿易の形成と構造』(杉原1996a)で日経・経済図書文化賞とサントリー学芸賞を同時受賞されるなど、(アジア)経済史の大家である。評者は、大阪市大の院生時代に、杉原・玉井編(1986)のセミナーの末席を穢したこともあり、本書刊行の報にこれぞ待望の一書と期待した。届いた本書の厚み、765ページにまず圧倒されたが、読み進むにつれて、期待をはるかに超えて、大胆な骨組みにして実に周到な記述に驚嘆が続いた。

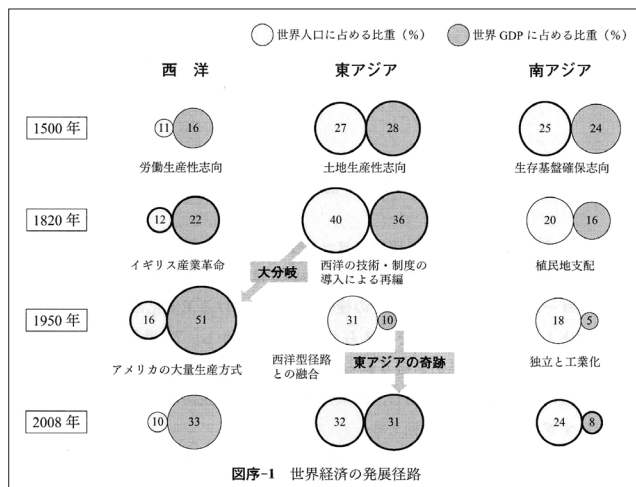
読むほどに評することが臆されたが、アジア(主に韓国)経済や開発論をかじってきた立場からこの大著に何を学んだか、勇を鼓して述べてみたい。

## 2. 内容と構成

本書の最大の論点は、1950年代以降、東アジア(日本、NIES、中国、ASEANなど)が人口を拡張しつつ同時に1人当たり所得を急増させた結果、西洋(欧米ないし大西洋経済圏)に並ぶ一大経済圏を出現させた「奇跡」を、19世紀後半の「大分岐」あるいは「ヨーロッパの奇跡」(ジョーンズ2000=1981)と並ぶ世界史の出来事と位置づけて(図1, 参照)、後者が世界史における「生産の革命」であったのに対して、東アジアのそれを「分配の革命」と対比させたことである。そして東アジアの奇跡=分配革命は、先行した西洋型径路との「複数経路融合」によるものであるという。

こうしたグローバル・ヒストリーとしての捉え方には、次の3点の特徴ないし含意があると著者自らいう(序章、pp.9-12)。1つは、20世紀におけるアメリカへの単なるキャッチアップでもなく、19世紀以来のウェスタン・インパクトへの対抗だけでなく、ウェスタン・インパクトのなかで「再編」され、それと「融合」した結果とする視点である。換言すれば、単線発展でもなく南北間の従属だけでもな

図 世界経済の発展径路



出所：本書、p.2、図序-1(原注は省略する)

い、「第三の見方」を提示したという。第2として、西洋型を「典型」とせず、東アジア型の発展径路もまた、先行した西洋型のそれと同様に、普遍性、波及力を持つものとされている。そして第3に、構造主義的接近とナショナリスト的接近をとともに退けて、「ヨーロッパの奇跡」の背景にイスラム文明との対抗があったように、東アジアの工業化の背景にはウェスタン・インパクトがあった。こうした破壊や支配を伴う接触を、複数の発展径路の「融合」ととらえ、その歴史的可能性を強調することだいう。

本文の構成は、序章・終章のほか、13の論稿(章)と3本の補論との計16もの論稿からなり、「第I編 東アジア型経済発展径路の成立と展開」「第II編 近代世界システム像の再構築」そして「第III編 戦後世界システムと東アジアの奇跡」という3部に編成されている。

る。第Ⅰ編が比較史的アプローチをとり、あと2編は関係史的な方法によるもので、そのうち第Ⅱ編はおもに19-20世紀、続く第Ⅲ編はもっぱら20世紀後半についてである。

具体的には以下であるが、著者の研究・思考過程をたどる参考として、各章の初出年を〔 〕内に付した。ただし、複数の論稿をベースに改訂した章もあれば、ほぼ原文通りの場合もデータの最新化などの加筆がなされているとのことである。なお、本稿では紙幅上、初出論稿の明示は割愛する。

- 序 章 東アジアの奇跡の意味するもの〔書き下ろし〕
- 第Ⅰ編 東アジア型経済発展径路の成立と展開
  - 第1章 勤勉革命径路の成立〔2004年〕
  - 第2章 労働集約型工業化の成立と展開〔2003～2013年の論稿をもとに書き下ろし〕
  - 第3章 資源節約型径路の発見〔同前〕
  - 補論1 南アジア型経済発展径路の特質〔2019年〕
- 第Ⅱ編 近代世界システム像の再構築
  - 第4章 近代国際経済秩序の形成と展開—帝国・帝国主義・構造的権力〔2003年〕
  - 第5章 近代世界システムと人間の移動〔1999年〕
  - 第6章 19世紀前半のアジア交易圏〔2009年〕
  - 第7章 世界貿易史における「長期の19世紀」〔2013年〕
  - 第8章 東アジアにおける工業化型通貨秩序の成立〔2001年〕
  - 補論2 イギリス帝国主義・シティー・工業化の世界的普及—ケイン・ホブキンズ『ジェントルマン資本主義の帝国』の射程〔2002年〕
- 第Ⅲ編 戦後世界システムと東アジアの奇跡
  - 第9章 アジア太平洋経済圏の興隆〔2003・2019年ほか〕
  - 第10章 東アジア・中東・世界経済—オイル・トライアングルと国際経済秩序〔2006年〕
  - 第11章 中東軍事紛争の世界経済的文脈—石油・兵器・資金の循環とその帰結〔2010年〕
  - 第12章 戦後世界システムとインドの工業化〔2001年〕
  - 第13章 グローバリゼーションのなかの東アジア—1990年代の軌跡〔2003年〕
  - 補論3 熱帯生存圏と「化石資源世界経済」の衝撃〔2012年ほか〕
- 終 章 総括と展望〔2008・2017・2019年論稿をもとに書き下ろし〕

これら本論のあとに、57ページにも及ぶ参考文献と21ページにわたる人名・項目の索引が続き、それらをざっと眺めただけでも、西洋・日本・アジア諸国の経済史、世界経済論、開発経済論、経済発展論、貿易論、アジア経済論などの領域で、これまで議論されてきた論点のほぼすべてが、必ず本書のどこかで取り上げられていることがわかる。

また、高度な専門性の裏付けがありながら、基本となる専門用語に内在する理論的背景や、通説ないし既成概念との相違点などについて、随所で丁寧な説明がなされている。事典的でさえある。とりわけ各編の概容を提示する第2章、第4章、第9章などは学部生・

院生等にとって研究の手引きとしても大変有益なはずである。

他方、初出刊行年をざっくりたどると、1990年代までのアジア間の貿易と人の移動に関する実証研究に続いて、2003年頃から本書の元となる論稿が多産され始めている。「あとがき」によると、その構想は、1996年、ロンドン大学でのセミナー発表以来、K.ポメラントツに代表される第一線の研究者らとの論議や共同研究の産物とのこと。まさに「融合」から創発された奇跡的労作であろう。実際、脚注や章末の〔補記〕ないし〔後記〕などに、そうした論争など研究交流の内容が、丁寧かつ簡潔に記されていて、本書に結実するまでの研究過程をたどることでより深く理解することができる。また何よりもそこに著者の研究者としての厳しくも誠実な一昔から変わりのない姿勢が映し出されていて、学ぶところ大である。

### 3. 「長期の19世紀」「東アジアの奇跡」の読解—方法論を中心に—

歴史(とりわけ近代史や経済史)において、西欧中心史観をどう克服するのか、言い換えれば西欧の歩みをいかに相対化しうするのか(羽田2011)、言うは易しである。アジア経済についてこそ、この課題に取り組む労作がすでにいくつか出されているが、評者の読解力不足のせい、それらも「グローバル」を標榜はするものの従来の世界史との違いが捉えにくいことが多かった。

その点、本書は明快である。その概要と方法論を確認しておきたい。

まず「東アジアの奇跡」について、評者は、後藤(2019:48-49)なども指摘する通り、World Bank(1993)とそれへのP.クルグマンの否定的な見解によって広く知られてきた、とのみ考えていた。そのため、本書でこの用語の危うさを述べるなかで(pp.18-19)、世銀のそれとの関連(相違)ではなく、世界史における「ヨーロッパの奇跡」(ジョーンズ2000=1981)との関連であることに、不勉強のほどをさらすが正直、虚を突かれた。

著者がとらえた「東アジアの奇跡」とは、前史としてヨーロッパの「産業革命」(資本集約化)に対して、労働集約化の「勤勉革命」に始まり、1930年代までにかけて形成されてきた(東)アジアの交易・経済圏のもとで、労働集約型かつ資源節約型の工業化が始まり、ヨーロッパ型との「融合」によって世界経済地図を塗り替える奇跡をもたらしてきたという<sup>1)</sup>。つまり、2つの奇跡はそれぞれ、「長期の16世紀」に始まる大西洋経済圏・アメリカと、他方で「長期の19世紀」の太平洋経済圏・日本によって代表される。両者は、時間差をもつため、後者は前者との「偶然」の「融合」に触媒されたとする。それを、従来の用語「後発の利益」と言わず「融合」と提起する理由は、模倣や受動だけでなく、かつ人間社会の

1) 世界経済の基軸がイギリスからアメリカに移るなかでアジアが台頭してくるという世界経済の変容過程が「ゆるやか」であったとする高良(2005)もまた、本書の問題関心とかなりが重なる。本書が労働(集約)に着目するのに対して、労働力に加えて需要構造を取り上げたところに高良氏の独創性があるように見受けられる。

営みとしての普遍性をもつ、内発的な社会動態に焦点をあてたいがためと理解される。

また、これまでのNIES・「東アジアの奇跡」論は、労働集約・資本集約という二分法をもととする狭義の工業化政策に重きをおいてきた。それに対して本書では、より長期のスパンで、また日本を主軸として、資本・労働に加えて第3の生産要素として天然資源に着目し(かつ大規模な移民流入がなかったことにも触れて)、これら3要素の配置から、南アジア・インドも含む、近世以降の世界とアジア、そしてアジア域内の分業構造に着目するところにも、斬新さがある。さらに東アジアの労働集約型工業化の歴史的起源を、1930年代に求め、当初は日本に領導され、戦後、NIES、ASEANそして中国へと広がることで世界史的な事象となりえたという。そうした地理的・歴史的な広がりのおかげで、アジア域内と各国の政治的背景をふまえつつ、主体性・内発性を帯びた工業化過程が胎動してきたというわけである。

このように、従来の世界史を超える新たな方法論として、ある事象に限定してそれらについて共通の尺度を用いるという試みが<sup>2)</sup>、繰り返しになるが、ここでは「(16~19世紀)ヨーロッパ・大西洋経済圏」と「(19~20世紀)東アジア・太平洋経済圏」という、異なる時代に異なる地域が世界中枢に躍り出た現象を、資本・労働・資源という3要素のあり様から対比し分析するという方法が提起されたわけである。

この方法を貫くにあたり、対比の射程に入りにくい地域や仮説にそぐわない事柄などについても、丹念に留意が付されている。例えば、東アジアの奇跡は確かに奇跡的であったが、アフリカ・カリブ地域などの絶対的貧困はまだ解消されていない。この点について、取り残された少数の人々の問題はむしろ先鋭化しつつあるというコリアー(2008)の指摘が、本書の冒頭、序章の注1)に記述されている(p.1)。同様に、ヨーロッパと東アジアのそれぞれの域内交易やその内部の地域状況について、史料の制約もあるとはいえ、掘り下げる余地があることも指摘されている(pp.215-216)。かように世界(史)の分岐という壮大なドラマを描きながら、いわばその幕間の史実にも実によく目配りがなされている。

後者の点に関連して、2つ付言したい。

1つは、東アジア域内を1つの経済圏として扱うとき、その主役は明治から戦前の日本に始まるが、貧困削減という奇跡の最大の立役者は改革開放以降の中国である。ミクロ的な一国史を超える方法として、マクロ総体の世界史と並行して、いわばメゾレベルの地域(アジア)史を掘り下げることで、ヨーロッパの奇跡との対比とはまた異なる姿が見えてくる。本書では、近代中国と日本の径路の違い(p.105、注2))などに言及されている。

第2に、杉原(1996a)への批判を多く含む堀(2008)など、朝鮮史をベースにアジアの内在的な発展径路を追求してこられた堀和生氏との論議が大変、興味深い(pp.386,398,403,414-416)。東アジア資本主義史論は、一国単位を超えるが、東アジア世界の資本主義の形成過程に最大の関心を寄せるもの(堀2021)と言ってよいであろう。東アジアの奇跡の原型との接点として、1930年代のアジア交易圏について、日本経済にとって

---

2) 秋田ほか(2016)のシリーズでは、「地域史と世界史」「国際関係史」「人々」「情報」「人口と健康」「もの」といった分節化をしている。

のアジア貿易・円ブロックの位置づけや、そもそもアジア間貿易が1930年代まで健在であったといえるのかどうかなどが争点とされた。

こうした議論を深めるためにも、堀・木越(2019)など、東アジア／太平洋経済圏の経済史研究への期待が高まる。

本書には、ほかにも、工業化型通貨秩序、中東・軍事(紛争／費)、熱帯生存圏、環境など、評者の手にはとうてい負えない広範囲のテーマまで展開されている。アジア／近代／経済史の論点がすべて揃えられた感がある。東アジア・欧米はもとより、世界の多くの研究者が手に取ること、一層活発な議論への起爆剤になるであろう。

### 〈参考文献〉

- 秋田茂・永原陽子・羽田正・南塚信吾・三宅明正・桃木至朗編著(2016)『「世界史」の世界史』(ミネルヴァ世界史叢書・総論)ミネルヴァ書房
- コリアー(Collier, Paul)/中谷和男訳(2008)『最底辺の10億人』日経PP社(原書は2007年)
- 後藤健太(2019)『アジア経済とは何か』中公新書
- 羽田正(2011)『新しい世界史へ』岩波新書
- 堀和生(2021)「東アジア資本主義史論—中村哲氏の研究成果をめぐって—」『新しい歴史学のために』297号、pp.32-40
- (2008)「総論 東アジア資本主義史論の射程」、堀和生編著『東アジア資本主義史論Ⅱ構造と特質』、pp.1-46、ミネルヴァ書房
- 堀和生・木越義則(2020)『東アジア経済史』日本評論社
- 猪木武徳(2009)『戦後世界経済史：自由と平等の視点から』中公新書
- ジョーンズ(Jones, E.L.)/安本稔・脇村耕平訳(2000)『ヨーロッパの奇跡』名古屋大学出版会(*The European Miracle*,1981/1987)
- 杉原薫(1996a)『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房
- (1996b)“The European Miracle and the East Asia Miracle: Towards a New Global History”『産業と経済』11-2: 27-47
- 杉原薫・玉井金五編(1986)『大正・大阪・スラム』新評論(初版)
- 高良倉成(2005)『現代世界経済の基層：ゆるやかな変容過程』大学教育出版
- World Bank (1993) *The East Asian Miracle: Economic Growth and Public Policy* (日本語版は『東アジアの奇跡：経済成長と政府の役割』白鳥正喜訳、1994年)

(名古屋大学出版会、2020年10月、765ページ)